

明烏後正夢

四編

上

^ 13
2909
13



13  
2003  
13

明倫彙編

家範典

卷之四

孝行

一

...

...

...

...

門へ 13  
2909  
巻 13

明烏四編序

柯を伐柯以伐之斧也

餅を膳屋乃世の辯言戯作と戯作は

楚湯人が其の銭の柄よすぐり法初山端の

小子を元をやのちり遊まぬ中法と山

と六代までとも同一流乃漢が今歳かちん

と新しき高貴なくは作者の雛鳥

百五

昭和九年七月二日

何ぞかろくくみまき口くちうきま講こうくく特とくままば  
 幸さいひひ稿こうをを抗かうくくあるある此この明あき鳥とりのの雲くも編あ目め乃なり  
 序しよ文ぶんととううけけよよとといいひひままててももままごご漸しんとと葉は五ご  
 一いちししのの此この角かく青せい泥でい柳りゆうのの若わ菜さい芽めたたををええれれ  
 筆ふでののままをを扱ありり扱ありりははるるののけけままどど大おほ扱ありりををままりり  
 名なめめくく押おしし南なん仙せん笑しょうがが驢ろ尾びののたたきき臺たいのの  
 鞭むちををたたりりととくく後のちのの正ただ夢ゆめ酒さけををぬぬくくをを

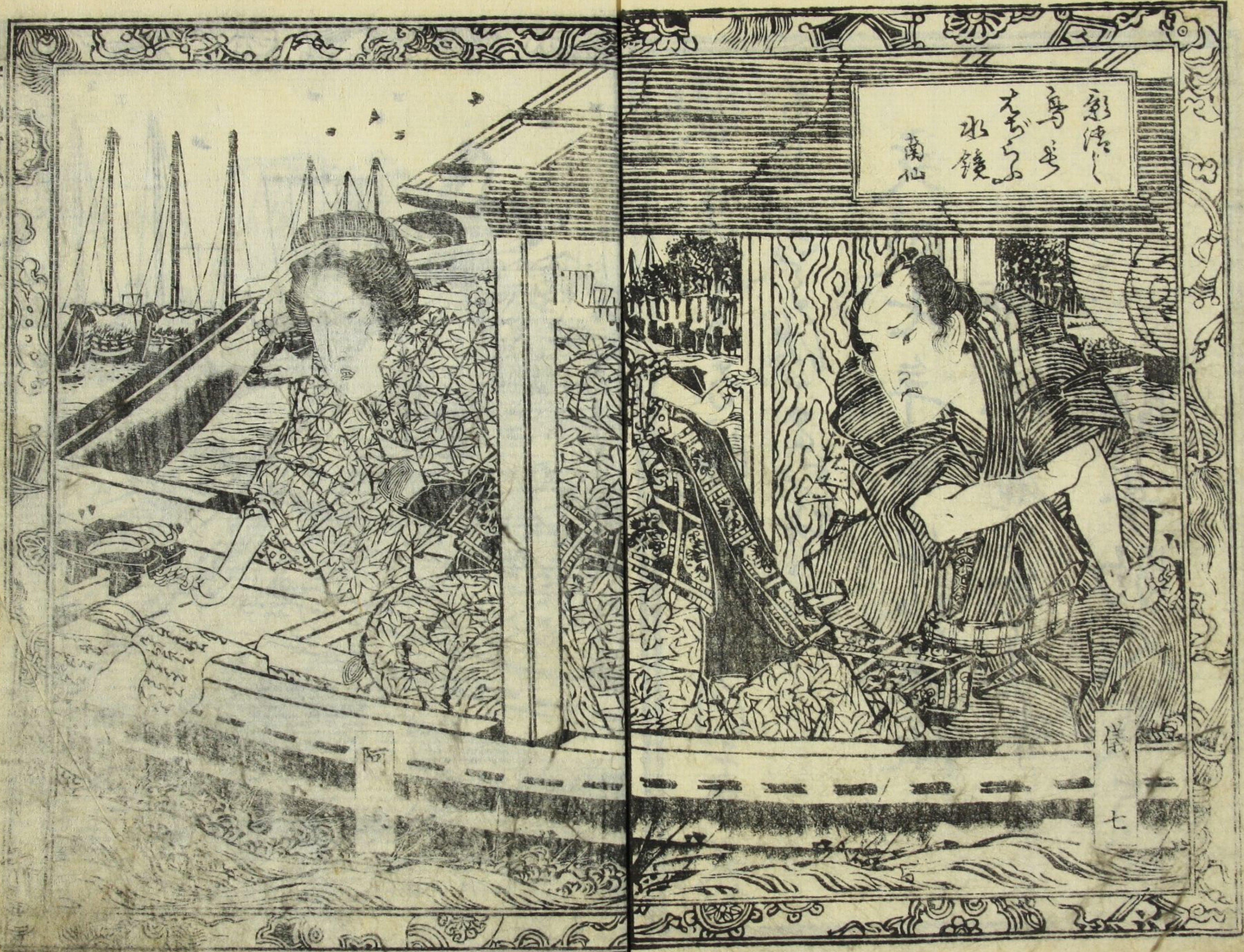
寝ね言ごののややううなな浪なみ話わををままりりのの卷まき  
 首くびよよままりりははるるのの持もち

文政七年甲申紅孟阪

柙漁庵のあし

驛亭駒人識





新法  
身步  
尤  
水鏡  
南仙

儀  
七



長五郎

浪吉

全六

舟楫の藝者行 驛亭

鳴舟うらやま  
急も流も  
おどろ



浦里 明為後正夢卷之十  
時次郎

江戸

南仙笑楚満人  
鵜亭鯉丈 合作

第十七回

説経節  
愛の長きとちり一対は安齋の足さるる舟の  
橋の初まよりのかのおもひのまはゆらゆらの縁に  
なまもとのを去まに夢渡すは十巻の巻の十巻  
波月舟への動にて若果とるは公長恋の巻

中の巻にきく... 苦界のあま

浦里も身にきく昔物語... 母のあま

美理ある姉の梅々... 住まう

子のお松が身の負難... 余所

日志のよ草... 情や物あ

身のおつ... 物あ

志や足... 身

石使... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身

あま... 身









わらひ泣こそ一ト海に内懸よこしとてあまき人こそ  
 泣くやまとも知らぬに料の泣目と扱ひ 梅言  
 ちづろくや我あまの安寿の娘のむねと思ひやとて  
 うろろと前後さまとていつの海さこの曲でらるの後  
 内前へあまびお執成お解くやと打あつらる無理に  
 笑ぐわの後よりいといと不便と奥方も人目紛らま  
 降ゆるに イヤの昔のいのづらうあまきとあら  
 ぬもむさく世六浮沈とりひらぐら五十四郡に名も

高き岩城の判官何茶と去まへ人もやましく討て  
 敵ハ何れのものぞ知らぬそのまゝ落らして親子見  
 知らぬ国珠又毎巻の山椒太夫 かんにさあま  
 あつちやとて安寿の娘とまきま 夫今の三男の  
 三郎とやらい憎いあり せま へてあど荒川  
 ままのこころや舟虫の コリヤあまそのまゝ  
 せまのこころに 似とてまゝ コリヤあまそのまゝ  
 せま コリヤあまそのまゝ 笑ひまゝの

おのゝかき

六

かまき隣へ筒ぬけ判右五門無念とあの人ど  
 女中とおひ當り眼の半印とくもそむらうく  
 祢り廻し判右十左五門どの見さうも置年にに  
 合ぬ悪根性迄ておどせばおてまへとめ仁田山  
 どのも涙めういそく人附こめうくと泣ても人  
 てまゆうへせぬ彼三男の三郎又身どまがよみ  
 おんうがやあつち年の情の足の十の巻の場は深くも  
 運び流るぬる程のも山椒を美と男の三郎ともに

と出ては登るもいや親人さまは姉め八柄と遊もら  
 注しまりともくに十の巻の波着かたまけ不届きのその  
 各各ぬる并と青ららく山椒を美と男の三郎ともに  
 知れぬらうの程のそう人にあらうくも身がままにて  
 うまのあらうるもどまが何そらに運ぶと女抱き左  
 後もあらうらにま十の巻の山椒を美と男の三郎ともに  
 半一て已中にあらうらもも種ひあらうらもも



山崎闇斎



世に  
 荒川  
 うめがき  
 山崎



山崎闇斎

山崎

さぞ増うろ身ぞも半海泪がきらひひめらるる

が大不得手えて。きやく有よふらて仕まへまきま

顔へ焼たそくあつた火へは焦たて運地獄の可貴月のあつ

ワアあつたとお松が叫が夢行に焼が保梅が答がさーとひ

後も東方の穴前とう様一毛のひ泣せららうらうて

測右門測方イヤサりくさるあくあつた何仰山に今の

火箸へ山椒太夫奈支とや耳中うすうの支向て

こそあはとととととよ額よあてて扇の骨夫見よ

知らぬとこの偽り聴にきう持て人のとと

餘所の鉄火も身あつたにこそゆる扇の骨きえ今の通

ぬらさや誠の焼火箸火鉢に打く契くと

あつた死なて我懐のあつたひあつたおどとあつた人ど十

左工門浦里お弓十次郎一ト間に冷あせおま

甘きであつたから暗も梅を郎成合きれおまと伴ひ

おて父の前あつた程き人の罪科へお備あつたあつた法

の衣とつらあつた由良の涙の梅とつらあつたあつた



みよ守護の市初念一語でわらうてそとくとお流る  
 差圖に下部の土平狭箱より札守白木の巻  
 茶くくくく物見のまぐさき上るとお局の取  
 次そのまゝに奥方へ捧げてまゐる取上るへ  
 ろいふ守りあわぬ願ひの一札うらと直よ  
 押むきくくくく及名書の女筆にわ  
 とどまあざかり兄の歌紙討た秘がひ幸嶮  
 甚三郎が妹にこの鎌倉に甚三郎があひ妻  
 こまは道徳の娘一人あつた歌もいまもあつた  
 ゆゑ浪くの男と敷きて千葉家の古主の奥方  
 へ細く願ひきりるまは深く感ぐしまひ  
 房とめして何やうん仰度あつて今の願ひ書  
 懐よ納め姫君とのまひ内殿へ歸せ入る  
 狭山大橋長雄とめめ奥女中のりづとあ供  
 るくおのまこと梅が音も此中にまをさし  
 内初あのと局の差圖にてお物見のまを歌

おのからと十

十

祭文のお露を従目錄にたてて品々賜ふ。  
願ひのう明日の沙汰あつて二見十左の宅へ  
来りてお眼めらるる。おはるる後有る  
涙身に余り明日と約して旅宿へ取らる。局  
へまゝ梅ヶ音にあつて奥方の信を待つが  
測右エツの當り眼泣入るお松と引居て支へ  
新吾十左のつと突退けて燃立なるの焼火  
箸に手拭引巻たてに斯よと入るる。

奥方の心算あつてお松の局中差梅ヶ音あつ  
と告ふ測右エツの驚たうつて焼火箸と  
袴の裾に押あつ。何氣もた風情局梅ヶ音あつ  
はきて紛夫れ一抽詮美手あつ。お松の  
あつて時次郎があつる詮美に不及お松の  
あつて間十左の勝手取斗入るる。  
夫にて昨日より二見氏の骨折拙者連  
と差出るる袴のあつる煙豆あつて執事

あつて

に堪へる糸拂ひ除く焼火をく側へ並ぶ  
仁田山が膝へ飛散る傷火のお伴十左の  
怪よ花生の水と二人がもぎ入打ふりして二  
度物里狼狽廻りて理屈も不首尾さら  
だり仁田山荒川刀と提て手持さく  
所こそはと目礼くあせうぐに立ち笑  
もそ様雨にあのうさく正中へ雷一ツ夕棠の  
軒の吹く如く

○かく奥方の仁半ちあつとくも千葉家の  
現ぞく大膳の悪み内々国家のうとのも  
あはれやまき荒川測左エのに替め  
更るまごごく折と入合何となく日数と重  
るあつとくやめ

第十八回

軒端の行燈に識と家名の女文字をて

爰へくる人の印と三輪の坊をうて客待宵に  
 蜘蛛の糸のまゝあはしく女房が舟扱くと端居  
 志て呼よ音よ小男度のまろつべらへ二人連  
 斗ふか先へと全六がけんめんがさろ荒川と誘ひ  
 爰に入来りあつちの女房 女房「ヤだまごとおあつちら  
 全六さん。きろいお見限ごね。まよふ且那よ入らる  
 ちやうとまろつ。モフ今日へけくうらぶとあ暑うらまを  
 まの。お二全六さんあつちろつああが度くまごて

おまきくろけ。ツミヤク波吉さんのあつちもあが  
 かにまてあつちまきま。モウ色男のうらまの福あつち  
うらまの福の茶サアあつちあつちろつまよふ全六ヤア  
よまを込でお家さん何のあつち。今日へけく暑のさうあつち。  
 且那と連て涼まごら。的めかあつちあつちまよふ  
 て色まご内方の首尾まよと流くろいあつちのこまご  
 あつちまよまごぬけてまごまよ。イヤモ誰有る春日屋の  
 店もあつちろ頭藏職まよあつちまよ。全六種々の

あつちのうた

十二





よ入明朝あつてのにもあつてのにもあつて一盃めくわづり

まゝ市ぞんりて来さるせまト舟のまじりの建續く

河岸倉の白壁六時あつぬ富士が根とあやまこれ

金城の落日に映ざる光景六佛の国に有との

乾園婆城に彷彿なり行と送を歸ると途へ出船

入船交々くさるる夕風の涼きに暫く夏と萱草

茂るもそ舟頭り浴衣とめので掉とる直つと

出さる川の面向かうは直まゝ市ヤアイ川次郎へ

昨夜ナてあくすのつくナ吾妻屋入のつと

女がナよこしてとく言傳とつと今夜行て

やややナ向かうそこの野郎へよくさるる

かろらあつてア野郎のつとめつと腰のま

赤イナ得手吉が瘡瘡でもまらるトひね縮緬のつと

市馬鹿アいやまトあつては又向かうおれはヤイ一本

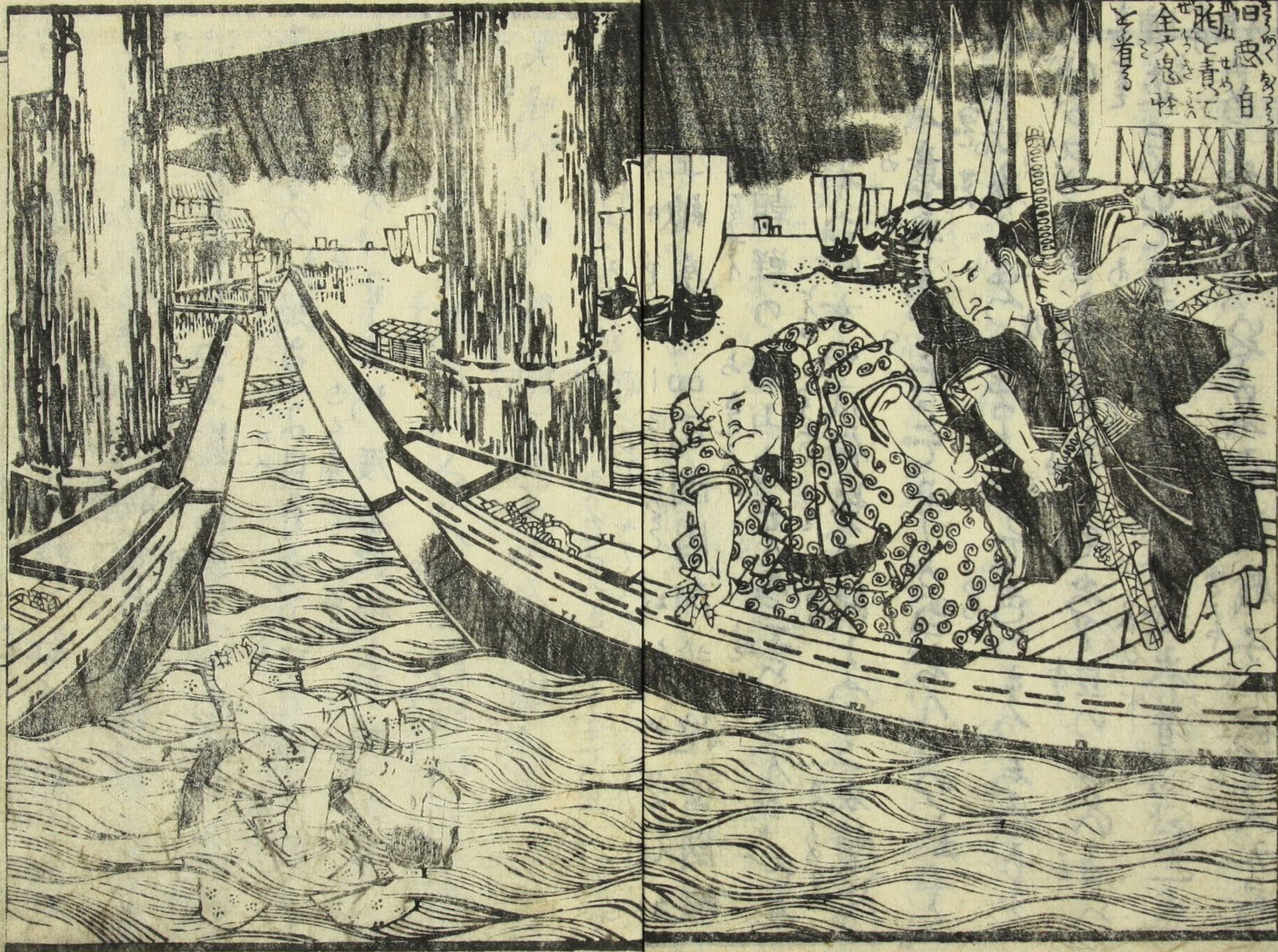
させくまゝらむらむらと當らくおれ揮くト

さすまらむらむら入金六割右あつ舟の中へ寂莫と二人の

一測時さ小せ全ぜん六ろく身みどもと無理むりにまめて連つてまるらんど。  
身みどもわもも芦原あしはらへの度どく同どう後ご共ともも同どう伴ばんでまるらんど。  
おのまのらの婦つま長川なががわとのちの地ぢとのちの始はじめて  
あのやがどのふの風ふう倍ばいのの呼よや全一いち予よらんどのまるらんど  
牛ぎをいや又芦原あしはらへのちのちの暑あつい時がふや  
まのどの水みづ辺へやまるらんど一いち向むかののや座交まじ  
ものナ見通みしとしてナ廣の座交まじのナ障さや子このひバ  
遙とほく向のよらんどのへ佃島しまらん品しな川がわ沖の木き牧の

端はたに上總そう房州ぼうしゅう四し国こく西せい国こく阿あ蘭らん陀だ壺ぶ國こく蝦え  
夷えい。皆みな立た朝あさ鮮せんの金山さん海かいそのえなあのへんがナこのま  
だらうのあのらの女にの風俗ふうぞく髪かみの結よううの衣い襷たす追おう  
あらうの意い氣きあのらのこので日がなあらんどいくあの玉たまと  
ひの女に子こ脊せきへのあのらのこのて色のまるらんどあのらのこ  
あのげがズウイとあのごの下したまであのらのまるらんどいくあの玉たまと  
踵かかと追おうらんど豆まめが鉄さう牛うしが金火か箸しゆらんど下や  
化かののまらんどあのらのこの李り園えん戲ぎ子こでのまらんどいくあの玉たまと





ひなぶら

あのかき

世の世  
胸と責めて  
全大徳性  
と着る

十七



あはれ 帳合しつう子。同ド所へ仕切判三ッ道お

まへり 一ヤ 淵 海よりあはれや。あはれかた

うらみのよ 全 何れも変りまへり

あはれかた あはれかた 照さるの親子庄有る

あはれかた あはれかた 照さるる国

連てらんであはれかた ま 牛の中

物とさう あはれかた 泣てあはれかた

たぐ あはれかた 酒さ

吞で氣分晴らそと夷菴へる あはれかた 一盃

吞で縁の あはれかた 船橋へ

いんご あはれかた 女子よんで見こ

所が誠 あはれかた 藝子が

あはれかた あはれかた 座あが淋しい

あはれかた あはれかた 浪吉と

あはれかた あはれかた 座あが

あはれかた あはれかた 思ひ

あはれかた

十





誰手づききり三味線のいしあめあつら合うす。  
時にあつての鳴物と二人蜜は耳に口私語合ふ  
うら後の方がうりと明て船頭が市一モ火繩と少  
あうりあて下さのま 全サ付さきとあうと忘  
てい。舟頭さん一ッ呑んり 市ハ有難あがらまを  
全イヤあろろ盆が秘あうてま。ドレハ川水で  
一寸さきいごと 簾と何ごうなく見あつたあ面  
雲間の月も朦朧と薄とろくと波の音。遠よ

あつ折しもあまうら姿ハ陽炎のそまあうぬり  
さのう頃うせし儀七が面影の色青さあてあう折  
に思ふぞワットろ落ま我手に持し盆とともバツリ  
音ささる向ひの船の青簾 全六あま 全ヤレ  
トの声霞む佃節 篠ひくあねてはくよるあは湯  
あぞあぐ柳みく小松右と左へ漕太りうら

浦里 明馬後正夢卷之十 終  
時次郎

